

平成 2 2 年 9 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 0428-23-6859）

未来の考古学者をめざして？！

～ 青梅・羽村こども体験塾 発掘調査体験 ～

記録的な猛暑が続いた今夏、8月3日から11日まで、その内の6日間という短い間でしたが、羽村市・青梅市の小学4年生から高校1年生の18人が発掘調査を体験しました。

今回発掘調査体験を行った青梅市野上町2丁目の「^{かすみだい}霞台遺跡」は武蔵野台地上にあり、遺跡範囲の北側に沿って霞川が東へ流れています。遺跡の範囲は約326,400 m²と大変広く、古くは岩宿（旧石器）時代から縄文、弥生、古墳、奈良・平安と各時代の生活の跡や使用された道具が発掘されています。特に、今から1700年前頃の弥生時代終りから古墳時代はじめ頃には、大規模の集落があったことが調査によりわかっています。

子供たちは事前の学習会で霞台遺跡や発掘について学び、発掘体験に挑戦しました。

発掘体験を実施した場所では、あらかじめ古墳時代前期の^{たてあなじゅうきょあと}竪穴住居跡が存在することが以前の調査で判明していて、古墳時代の地面であったところは現在の地上より1m程下にあり、そこまでは^{ゆあつ}油圧ショベルであらかじめ掘り進めました。住居はさらにそれより約40cm掘り下げて床面にしています。子ども達は住居の床面を出すように掘り進んでいきました。発掘という^{はけ}刷毛や竹串で地面を掘っていくイメージがありますが、大部分は^{いしよく}移植ごて（スコップ）で5cmくらいずつ土を掘り下げます。途中、土器や石器、炭化物などが出土すると、そのつどそれらが見つかった場所を特定する竹串を刺しておきます。

土を掘っては^み箕という入れ物に入れ外に運ぶ、汗を流しながらの作業が続きました。小さい土器のかけらにも驚き、広く浅く掘ることに苦労しながら床面が近づきました。

古墳時代の住居の床は当時の地表面から間取りの広さだけさらに掘り込んでいます。また、住居の床を掘り込んだ時に凸凹になった面を平らにするために土や



油圧ショベル



刷毛



移植ごて



箕

粘土を入れてならした跡（「はり床」といいます。）も確認できました。いずれも、生活の中でよく踏みしめられている分、移植ごてでも床の固さはすぐに判断できます。それから床に近づくに従い黒い土から黄褐色の土（関東ローム）へと土の様子も変わっていくので、子どもたちにも土の色の変化や硬さがよくわかったと思います。



体験の様子

子どもたちは、なぜ発掘調査が必要なのか、また、作業のひとつひとつにも意味があることを調査員や学芸員から学びました。1700年前の人々が歩いたであろう床面に立ち、古墳時代の生活を想像したり、今の生活の便利さを痛感した6日間でした。



出土した土器の底部

残念ながら遺物(土器や石器など)はほとんど出土せず、がっかりした様子の子もいました。過去の体験では台付甕、壺、甑だいづきがめ、つぼ、こしき（食べ物を蒸す時に使用する底に穴のあいた土器）などが多数出土しています。



掘削した竪穴住居跡

しかし、今回発掘体験を実施した住居跡は住居跡を見下ろすと6m×5.5mの方形で四隅が丸く、この遺跡中最大級に近い大きさの立派なものでした。住居跡南側壁際には「貯蔵穴ちょぞうけつ」といわれる食べ物を保存しておく穴もありました。これには周りを土手のように少し高くする特徴もみられました。

発掘体験最終日、子どもたちは住居跡の大きさを実測し、方眼紙に記録する作業にも挑戦しました。1m四方に張り巡らした糸を基準に20分の1の縮尺で点を打っていきます。メジャーで計測する人とそれを紙に記録する人、今までの肉体労働と違って変わって頭脳労働です。各グループ悩みながら少しずつ作業が進みました。



メジャー

今回の発掘調査は報告書も作成され、子どもたちの一連の作業も調査として報告されることになっています。この暑い夏の発掘体験は子どもたちの心に考古学の種を植えつけることができたでしょうか・・・

東京都市長会の助成を受けて実施された発掘体験は平成18年度より行われ、今回で5回目となります。現在、青梅市郷土博物館で開催されている企画展「霞川ほとりのくらし」には各年度の発掘体験塾の調査風景と出土品が展示されています。

遠くに奥多摩の山々、あるいは富士山の噴煙を望み、古代の人々は永く霞川の台地に暮らしてきました。そんな暮らしの一部をぜひ博物館でご覧ください。（文責 小島みどり）

企画展「霞川ほとりのくらし」 平成22年8月28日から12月26日まで